「出題の意図」

選抜区分	２０２５年度　（選抜区分：学校推薦型選抜） 法学部　法律学科及び政策科学科　（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	１　課題文選択の背景 出典は、堅田香緒里著『生きるためのフェミニズム――パンとバラと反資本主義』（タバブックス、2021 年 7 月）である。本書は、社会福祉学を専門とする筆者が、女性の活躍、ケア労働、路上生活、都市の再開発、生活保護など、さまざまな領野での格差、貧困、分断の問題をフェミニズムの視点から読み解いた書籍である。本問は、近年の女性の活躍推進の政策にみられる問題点を論じた第１章から出題した。 筆者は、女性の活躍推進の議論において、女性間の格差や、貧困、男女不平等など、構造的問題にかかわる視点が看過されていると主張する。一方では、女性が積極的に能力を発揮し、活躍することが推奨される。しかし、その結果、活躍できない女性は、「努力不足」あるいは「能力が発揮できていない」と捉えられる。他方で、このような教義は、身を乗り出して働けない女性たちへの社会保障の充実など、本来ならば国家が公的責任をもって対応するべき構造的問題を、個人の能力の問題にすり替えてしまうと筆者は指摘する。1980 年代以降、多くの現代福祉国家において、さまざまな公的サービスが民営化／私有化され、それに伴い、貧者の生活保障に対する公的責任が縮減された。その結果、「活躍していない／できない」女性に対する社会保障が不十分なまま、個人の「自立」や「活躍」が求められている。筆者は、これらを女性の労働をめぐる事例を通して、近年台頭しているネオリベラル・フェミニズムの教義と照らし合わせながら論じている。結果として、女性が社会進出するために不可欠な、性別役割分業の問題や、女性間の経済格差は不可視化され、「活躍」できるエリート女性と、「活用」される労働者階級の女性との間での分断が生じている。 近年、女性の社会進出と言えば、当然、達成すべきものとして理解されがちである。しかし、「女性活躍」に関わる一連の政策的動向や議論では、さまざまな構造的問題が不可視化されている。受験生には、筆者の主張を正確に読み取ったうえで、その限界や可能性について多角的に捉え、自説を展開してもらうことが、出題の狙いである。 ２　受験生に何を望むか まず、筆者が問題提起している、現在の女性の活躍推進の問題点について、適切にまとめる力が求められる（読解力）。次に、これまで中学や高校等で学んできた知識を総動員して、論理的・説得的に、女性の活躍について複合的な視点から考察し、かつ自分の言葉で表現することが求められる（自説展開力）。